

双葉町復興まちづくり計画案に盛り込むべき内容について
～委員からの提案～

委員氏名	1 計画の基本理念やキャッチフレーズ	2 その他計画に盛り込むべき内容
井上 六郎	<p>* 絆を深めるふたば町 家族・町民・地域社会・県・国・世界と発展していくであろうことを絆を生活の理念として</p>	<p>「仮の町」一局集中型・分散型なのかどちらを選択しても長短があり考慮するところである。したがって大きな町・小さな町・その中間的な町くらいの町に絞り拠点地を設定し住みたいところの希望をアンケートの資料によって分かるのではないかと。 ある程度の目安を何年で帰れるのか、帰れるためのインフラ整備はどうなっているのか、線量の低減の推量などを示すことも必要ではないかと。 それによって、施設・建築物・規模などがわかりやすくなっていくと思う。</p>
笠原 真一	<p>* 故郷と町民をつなぐもの</p>	<p>数回の議論に出席して思いました。県内にもどる人、戻らない人。2つの大きな問題がありますが、そこからさらに枝分かれして様々な問題点が出ました。話が大き過ぎて一つ一つ解決するにはまだ時間がかかります。 しかし両極の意見を持つ委員さん達の共通な思いが一つあると思いました。それは”双葉町を残したい”思い。そして”お墓”の話が出ました。これだと思いました。まず出来る事があるとすれば、町民の共通の思い”お墓”の再生が最優先ではないでしょうか。復興委員会の一つ目の成果としてお願いします。年に1回、2回でも双葉町には戻りたいと私も思っています。もう一つの”つなぐもの”として思うのが、学校の再生。それも県内に双葉の名を残してほしいです。希望者が一人でもいればそれは成り立つという町から回答がありました。 ”お墓”とともに”学校(双葉)”の再生。小中学校長がおっしゃっていました。”スピード”とよろしくお願いします。</p>

双葉町復興まちづくり計画案に盛り込むべき内容について ～委員からの提案～

委員氏名	1 計画の基本理念やキャッチフレーズ	2 その他計画に盛り込むべき内容
木村 真三	<p>現時点では、「復興まちづくり委員会」で出た意見とは別途、議会や町長が仮の町や帰還についての方針を発表することもあり、計画がどの程度本当にまちづくりに活かされるのか明確でない。</p> <p>今後帰還するかどうかの見通しすら経たず具体的な資料やデータがないまま議論が続いており、基本理念やキャッチフレーズは極めて曖昧なものにならざるをえない。</p> <p>町長案、議会案(解散前の議員?)、復興まちづくり委員会案、7000人の復興会議案、その他、意見のある人は案を出しつくし、その中でそれぞれがよいと思ったものを投票で決めるなど、納得でき意味のあるものにしてゆくべき。</p>	<p>* 計画案の姿勢について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「帰還ありき」の議論を進めることなく、将来のことを考え町民全体で方針を考える。 ・ 町長、議会、町民、委員それぞれがもつ意見のうち、どれか一つが先行して決まったりすることのないように、全員で議論する。どの案がよいか、必要に応じて投票を行う。 <p>* 帰還時期が決まるまでの対応について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 帰還時期が決まるまでの間は、放射線量(空間、土壌、動植物等)について研究者によるチームを組織して継続的にモニタリングを行う。情報はすべて公開するとともに、第三者の専門家による評価も加えることで透明性を高める。 ・ 墓参りや一時帰宅について、例えば、お盆の時期に町民皆で慰霊と墓参りを行うなど、町民のつながりを維持するとともに必要以上の被ばくを避けるための方法について議論する必要がある。 <p>* 十分に審議されていない事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの「7000人の復興会議」と「復興まちづくり委員会」との整合性をどうつけるのか。両方並行して行われているが、「復興まちづくり委員会」で話し合われ議論が進んでいる内容が、町民に伝わっていない。一方、「7000人の復興会議」で話し合われた一人ひとりの意見が「復興まちづくり委員会」で活かされているかも疑問である。 ・ 「7000人の復興会議」については、実参加人数が明らかにされていない。複数回参加した人を除き、参加人数に対して意見がどの程度あったのかを示すべき。 また、そこに来ている人たちの個人情報はきちんと集められているのか。匿名で責任の無い発言でなく、町のために足を運んだ一人ひとりの思いとして大切に扱い反映するためにも、誰がどのような意見を言ったのか把握すべき。ただ数を集めていっていても、町民7000人の声にはならない。 町民の意見として一つの方向を向くためには、情報を公開しはっきり議論をしなければいけない。

双葉町復興まちづくり計画案に盛り込むべき内容について ～委員からの提案～

委員氏名	1 計画の基本理念やキャッチフレーズ	2 その他計画に盛り込むべき内容
重富 秀一	(1) 基本理念 ① 誇りある故郷ふたばの再生実現 ② 安全・安心が保たれる持続可能な町づくり ③ ふたばを愛する7000人すべての人の力を結集した復興 (2) キャッチフレーズ ○ ふたば「起き上がって」再生するぞ！ ○ とりもどそう双葉 ○ ふるさと双葉の再生と帰還にむけて	＊ 復興促進のため双葉郡7町村との連携強化を図り、特に隣接する(北部双葉地区)との共通案件や課題の解決に向け行政機能の統一化等を検討する。 ＊ 将来を担う子どもたち(小学生・中学生)の意見を反映出来る計画
高野 泉	＊ ハッピー アイランド 双葉 ＊ ”みんなで 支えあおう 双葉”	＊ 中・長期の計画
高野 重紘	＊ 新生双葉地区(町)を造る ○ 放射線量が多く帰れない人 ○ 放射線量が心配で帰らない人 これらの人達の為に私達は国の原発政策の犠牲になったので、関東地区(加須市でも良いと思う)に国策により住む場所を提供していただき、子供、孫達が安心して生活でき、学校生活そして就職ができる所を確保してほしい。	
中村 富美子	＊ 未来につなげる双葉町の絆 ＊ 伝えて守る双葉町	＊ 私達がなぜ双葉町の古里から出て現在ここに居なければならないのか伝え続けたい。 ＊ 原発事故のウソ、本当 二度と事故は起してはならない。私達だけでもう被害者を出さないでほしい。
中村 希雄	＊ ”双葉を思い出せる空間(コミュニティー)”	一気に新町双葉は創成できないのだから、とにかく一カ所双葉コミュニティーを作る。移動したい家族を順次受け入れて成長させていく。 他の避難地域で生活している家族は各自の判断で現状の地所に住み続けられれば良い。双葉役場機能についても今のままで不便と感じない。

「双葉町復興まちづくり」のテーマについて

—双葉町持続コミュニティデザイン「仮の町」システム—

双葉町復興まちづくり委員 宇杉和夫

双葉町復興まちづくりに参加して、また「きずな部会」に参加して、皆様との議論を通して、以下のコメントを年の初めにまとめてみました。個々の内容については幅広く議論・協議の上、双葉町町民に限らず、支援地域においても、あるいは日本国民の間にも共有化していくことが重要である。(20130104)

1. 「双葉町持続コミュニティデザイン F・SCD」が望まれている。

- ・ 「双葉町持続コミュニティデザイン F・SCD」を下の図式で考える。
- ・ 「F・SCD」には「F・SCD・地域交流支援システム」の早急な構築が必要である。
- ・ 「双葉町町外(持続)コミュニティネットワーク」の構築が現在の最大の課題である。
- ・ 「双葉町地域コミュニティ再生継承デザイン」の合意が必要である。

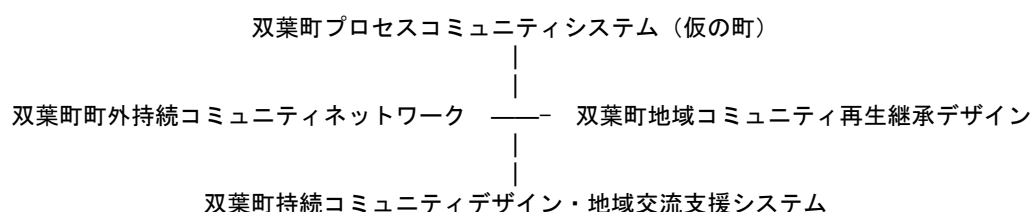


図1 「双葉町持続コミュニティデザイン F・SCD」の計画枠組み

2. 「双葉町地域コミュニティ再生継承デザイン F・SAD」の合意が必要である。

- ・ この国に人の住めない国土をつくってはならない。地域空間双葉町を再生し、次世代に継承しなければならない。「双葉町地域コミュニティ再生継承」の長い「プロセスデザイン」の目標の合意と、あわせてファーストステップの合意が必要である。
- ・ 「双葉町地域コミュニティ再生継承」の長い「プロセスデザイン」の目標とは「双葉町の地域の原風景」、「双葉町地域コミュニティの原風景」の再生・継承と考える。
- ・ 「双葉町地域コミュニティ再生継承」のファーストステップは、「仮の町」とあわせて関連的に「双葉町地域」の中に「地域コミュニティ」の象徴としてどのような居住空間(「帰還の船」)を最初につくるか、である。

3. 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク F・SCN」の構築が基盤になる。

- ・ 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク F・SCN」の基礎Aは「町内会」と「学校」である。
- ・ 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク F・SCN」の基礎Bは「避難仮居住(学校)プロセス」である。

- ・ 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク F・SCN」の基礎 C は「現在の避難仮居住（学校）」である。
 - ・ 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク F・SCN」の基礎 D は「仮の町（システム）」すなわち「双葉町プロセスコミュニティシステム（仮の町） F・PCS」におけるネットワークである。
 - ・ 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク F・SCN」の基礎 F は「帰還の町（システム）」におけるネットワークシステムである。
4. 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク F・SCN」は、次の内容を課題とする。
- ・ 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク」の対象町民の現状を特定する必要がある。①（福島県外）避難施設居住者、②応急仮設住宅入居居住者、③福島県内の借り上げ応急仮設住宅居住者、④福島県外の借り上げ応急仮設住宅居住者、⑤福島県内に仮居住している上記以外の居住者、⑥福島県外に仮居住している上記以外の居住者、⑦福島県内への震災後移住者、⑧福島県外への震災後移住者。なを、町民の居住移動経過プロセスを常時把握し、モデル化したものを「F・SCD 基本計画資料」とする。
 - ・ 「双葉町町外持続コミュニティネットワーク」は、地方自治行政体町民と行政サービスの関係、および町民参加行為の円滑な運営を行えるものとする。
 - ・ 同上は、町民相互の地域内コミュニケーション・交流と、ビジネスも含めたあらゆるコミュニティ活動・福祉活動を再生し持続的に活発化するものとする。
 - ・ 同上は、震災以前の双葉町の歴史的なコミュニティシステム、コミュニケーションシステムを基礎にし、持続的に発展するものとする。
 - ・ 双葉町の郷土固有の持続的なコミュニティシステムについては、記録記憶の整理発見を重視し、「コミュニティアーカイブ」として次世代に継承することを目的とする。
5. 「双葉町持続コミュニティデザイン・地域交流支援システム F・RCS」の統合的編成が必要である。
- ・ 双葉町町民が避難仮居住した支援地域において、支援地域との交流は重要な課題である。これをシステムとしてモデル化、統合化する必要がある。
 - ・ 支援地域との交流にあたっては、双葉町原風景および地域固有の空間資産や伝統的文化的資産の継承行事が価値をもっている。地域固有の空間資産・歴史文化資産については、記憶伝承のみならず再発見・発掘も必要な課題である。
 - ・ 「双葉町復興」は東日本復興の象徴的な存在である。各支援地域とは今後継続的に相互支援の形を形式化し、そのプロセスを日本国民に、世界に示していく必要がある。
6. 「双葉町プロセスコミュニティシステム（仮の町） F・PCS」の構築
- ・ 「双葉町・仮の町」とは「双葉町プロセスコミュニティシステム」を実現する空間および空間システムすなわち「双葉町持続コミュニティデザイン」の拠点（群）である。
 - ・ 目的と役割を明確にした「プロセスデザイン」と「双葉町原風景」および目標となる「帰還の町」が表現された居住再建持続機能空間「仮の町」構築へ

双葉町の復興に向けた提言

清水修二（福島大学）

1. 復興に向けた基本原則：「選択・自立・調整」

- (1) 選択：たとえば移住・帰還いずれを選ぶかの選択権を、住民に保証すること
- (2) 自立：電力や政府の賠償・補償を求めつつ、それに依存しない道を歩むこと
- (3) 調整：住民間、あるいは町内外における地域間の利害調整を大胆に図ること

2. 帰還の基本方針

- (1) 短期・中期・長期の時間差を設けて可能な帰還方策を設計する
- (2) 汚染状況に応じ自主的ゾーニングを行い計画的土地利用を図る
- (3) 新天地志向=旧居住地（元の場所）に戻ることにこだわらない
- (4) 復興のための効率的なコスト配分=メリハリをつけた財政運営

3. 土地利用の再編成とインフラの再構築

- (1) 土地利用を白紙からデザインし直す。旧土地利用の復活にこだわらない
- (2) 本人の了解のもと町民の土地所有権を集中管理し、再配分・再配置する
- (3) 帰還計画にもとづき、学校・病院等の社会インフラの移転・新設を行う
- (4) 上下水道を初めとするライフラインは基本的に復旧ではなく新設とする

4. 除染に関する方針：復興財源を捻出するための効率化

- (1) 放棄した建造物は除染せず処分する等、除染の計画化・効率化を図る
- (2) 墓地などコミュニティの重要な共同資産は別格とし優先的に除染する
- (3) 町内の除染廃棄物は町内の帰還困難地区に中間貯蔵する=自区内処理

5. セカンドタウン=仮の町

- (1) 現状で「移住」を選択する住民の移住を支援し「未来町民」として処遇
- (2) 当面「避難」の継続を選択する住民に対し各地に「きずな職員」を配置
- (3) 住民サービスも重要だが町役場はいわきを拠点に現地復興に主力を傾注

6. その他の留意点

- (1) 広域的な観点：双葉郡全体として復興をデザインする
- (2) 賠償・補償について明確な見通しを立てることが重要